長崎県地学会誌　第43号　12—16（1985）

海外報告

台　湾　旅　行　記

小　林　　茂（特別会員）

My Trip in Formosa

Shigeru KOBAYASHI

発　　端

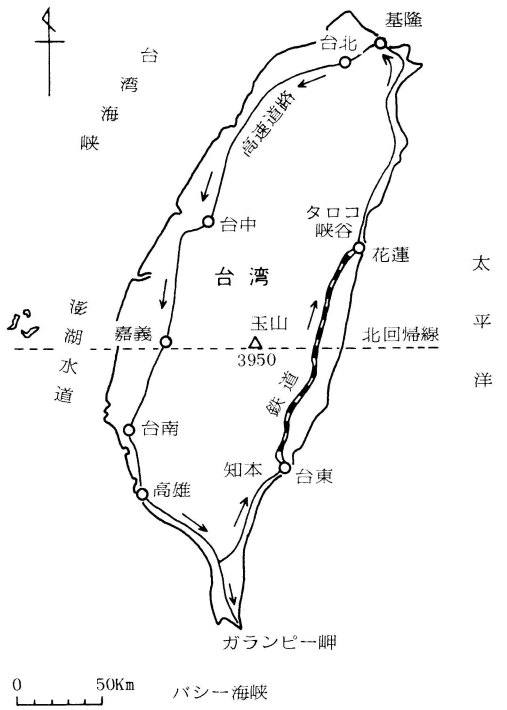
昭和60年4月24日の日曜巡検「諫早少年自然の家付近の沢歩き」の時，台湾旅行の話をしたら，是非地学会誌に一筆書いて下さいとのこと。半ば忘れかけた記憶をたどりどうにかまとめたが，5泊6日の観光旅行のお粗末な督見に過ぎない。

私はまだ台湾は訪れたことがなかったので，昨年春，毎日新聞旅行社の台湾一周旅行に友人と2人で参加した。板付—台北は中華民航機のA300。機内のサービスも思ったよりよい。費用が他のツアーより数万円安いので，はじめどんな待遇か気になったが，その後ホテルも食事も一流で，そんな心配は杞憂に終った。

台湾を今日Formosaと呼ぶが，これは16世紀ポルトガル人が東洋を航海し，洋上より台湾を目のあたりはじめて見て「おお美しの島」と感嘆の声をもらした言葉が，そのまま国名になったという。私達は小学校で，台湾はさつま芋の形をしていると教わってきた。現地では自分の国は米粒の形をしているという。この米粒，面積は九州より少し狭いが，人口は2倍くらい。日本には標高3,000mを超す峰は数える程しかないが台湾の脊梁山脈には86峰もある。

西海岸を南下する

西海岸に沿った高速道路を北の台北より熱帯圏の高雄までバスで南下し，東海岸は特急「莒光号」



で北上した。沿線の目にふれる植物は九州など温帯の照葉樹と違って，椰子，バナナ等の熱帯植物で，水辺に遊ぶ水牛ののんびりした姿ももの珍らしい。南下の途中の嘉義近くに，北回帰線の記念碑がある。途中下車して記念撮影。観光客は皆ここで下車するとみえ，果物の物売りが控えている。ここで食べたパイナップルやバナナの美味が忘れられない。

北回帰線の意味がガイドの説明でもよく分らないという。そこで私が一役買って，具体的に次の

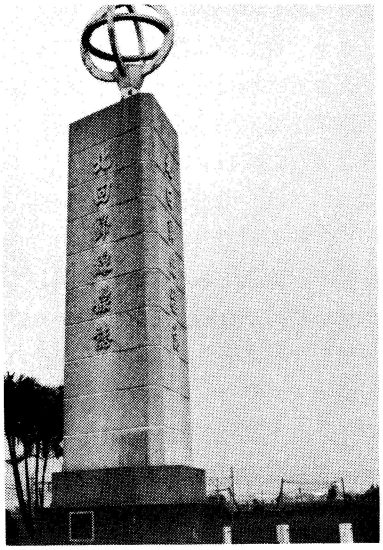


写真１　北回帰線に建つ標誌

写真２　標誌建立の経過をしるした碑文

ように説明した。「日本では夏至になっても，まだ太陽の影が短くできるが，ここでは頭の真上に太陽がくるので，影が全くできない。例えば真すぐ堀った井戸であったら，夏至の日の正午頃には太陽が底の水面の中央に映る」と。

この付近は穀倉地帯で嘉義には戦前よくその名を知られた学校「嘉義農林」があった。日本の指導で普及した蓬萊米は，現地人の口にはあわず今日作られていない。当時植えられたマンゴーの木は，今では延々と続いた美しい街路樹として残っている。

南部の高雄近くで，私は友人は車窓より指さして，あの山の上の陣地で終戦を迎えたと言う。高雄に着いたらまず万寿山に登った。全山石灰岩よりなり，公園になっていて，市街と港が眼下に展開する。バスで私と席が隣り合せの人は，「戦争中ここは陣地になっていて，私は守備兵であったが，日本軍の輸送船が港口近くで米潜水艦に撃沈されるのをこの地点より目撃しました」と話していた。台北では日本の統治時代の総督府，台湾銀行，裁判所等当時の面影を残していると懐しそうに写真をとっている人もいた。主人が長くこの総督府に勤めていましたという夫人もいる。旅行に参加した人には，大抵何らかの形で台湾の土地に忘れられぬ思い出につながるものがあることを知った。

最南端—ガランピー岬

ここから更に車を馳せて台湾の最南端ガランピー岬に立てば，もうそこはバシー海峡。かつて日本の輸送船の墓場となった海域であるが，今は白く砕ける波が岸を嚙み，空は抜けるような青空。一帯は隆起サンゴ礁で新鮮なサンプルを拾って記

写真３　台湾の最南端ガランピー

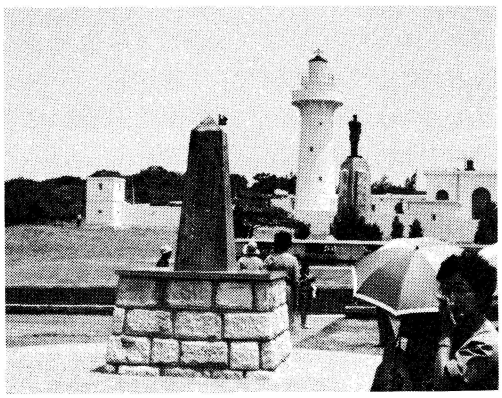


写真４　ガランピーの燈台　銅像は蔣介石

念とする。私達がかつて南方で「南洋松」と呼んでいたモクマオウが繁っている。私が戦後半年過ごした北ボルネオのゼツセルトンの捕虜収容所が丁度こんな所で，毎日海を眺めては望郷の念にかられていた。こうして再び熱帯の海を望もうとは，まるで夢のようである。収容所では，原始人のように枯草を海岸の砂浜の上に敷いて寝床とし，夜半目覚めると，天幕の裾を上げて南十字星を見て時の経過を知った。赤道に近い収容所では南十字星のたて軸が，地平の南点を中心として，時計の短針と同じように1時間に15°傾く。

昔大洋を航海する人にとって，星が唯一の道しるべであったように，当時幽囚の私にとってサウザンクロス（南十字星）は闇夜に輝く希望の星として慰め励まされたので，瞼に焼きついていた。もう一度眺めることは今度の旅行の目的の一つであった。

知本温泉と花蓮の大理石

台湾の原住民は，言語・風俗を異にする6つの種族からなり，今日2,000m以上の高地に主として住んでいるが，どこから来たのかそのルーツは詳かでない。ガランピーより宿泊地の知本温泉に行く途中，車窓よりその中の1つであるアミ族が，河原に湧出する温泉のほとりにテントを張っている風景に接した。ホテルは新装間もなく，山間の河岸段丘上に建っている。学生とか職場の団体客で満員の盛況である。生きいきした表情の女子高校生らしきグループが高台にある玄関前でいかにも楽しそうに語り合っている。その風景がいかにも微笑しかったので，ごく自然に「你很漂亮（ニイヘンピヤオリヤン）」（あなたはとても奇麗です）と言うと，その中の一人からニッコリ会釈して日本語で「有難うございます」という返事がかえってきた。

隣室にはたまたま日本人が泊り合せた。その人は石材関係の調査をしており，うっかり山に入って資源調査などしていると，とがめられることや，豊富な大理石の資源が戦後に発見されていることなど話していた。

翌朝早く谷にこだまする鳥の声で目が覚めた。日が出ると谷に立ちこめていた霧が一斉に山はだをはい上り，様々の小鳥の合唱が一段と賑やかになって，まるで桃源境に遊ぶ心地がする。

翌日は花蓮で大理石の工場を見学して驚いた。日本に輸出する完成品の庭石とか机等の梱包が倉庫に満杯。宝石の原石もいろいろ見せてくれる。ヒスイについては，母岩となっている磨いた蛇紋岩を示して，その中で宝石として利用できるヒスイがごく僅少な範囲であることを説明していた。その夜ホテルでの夕食時，この工場から蛇紋岩の表札の註文をとりに来た。沢山の人がそれに応じたが，翌朝バスの発つ前に完成品が届けられた。土産品店で，うす茶色の大理石の花瓶を手に取ってみると，白い斑の模様が殆どカキの化石らしいので買ってきた。

タロコ溪谷

台中と花蓮を結ぶ横断自動車道は戦後完成された。とてつもない難工事には，中国大陸より内戦で追われて台湾に渡ってきた軍人が30万人もが投入されたという。その軍人も今や老境に達し，その多くは大陸に残してきた妻子に再び会うこともなく，施設で淋しく老後の生活を送っている。ここでも生々しい戦争の傷跡を見せつけられた思いである。

目のくらむような断崖絶壁に沿って車は走り，上を仰ぎ見ると，空が帯のように狭く延びた所で車を下りて暫く歩く。この付近は有名なタロコ溪谷である。数100m以上の絶壁であるが，峰の頂はこの日雲の中にある。土地の隆起に伴い，侵食作用が進んだ結果であろうが，とにかくそのスケールの大きさに圧倒される。

私達は横断道路の一部を見学しただけであるが，長崎県地学会会員の朝永治雄さんが，台湾総督府鉱務課に在職中の昭和11年4月5日より4月15日にかけて，このルートを踏査された当時のスリルに富んだ報告が地学会誌第11号に「台湾横断旅行記」として掲載されている。私達はその当時の絶壁にかかる危げな桟道の跡を車窓より眺めることができた。河が氾濫したあとで，河口付近では業者が砂金を採取しているのも見られるということである。

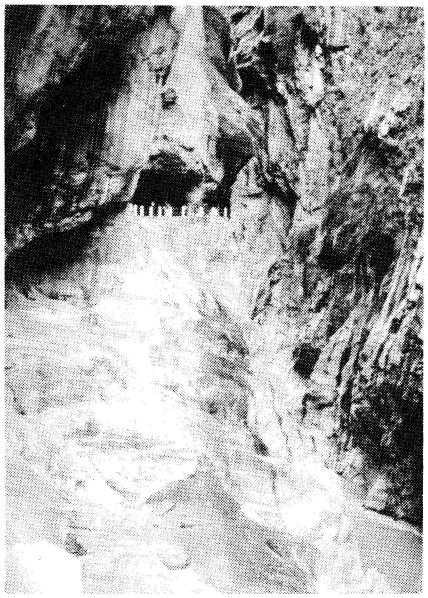


写真5　タロコ渓谷

花蓮から台北へ

花蓮の街角では，軍人のような服装の若者が交通整理にあたっていた。聞けば高校生であるという。台東より東海岸沿いに特急列車「莒光号」で北上したが，途中の鉄橋の橋頭には監視所があって，鉄砲をもった監視兵が立っていた。そして到る所で，空にはジェット機が哨戒している。飛行場に機影が認められないのは，着陸すると直ちに地下壕に退避するからだという。台湾は勿論徴兵制で臨戦体制をとっている。バスのガイドも台湾軍の退役空軍将校であった。戦費の国家予算に占める割合はＧＮＰの40％に達し，１％を超えそうだと大問題となっている日本とは雲泥の差である。国民所得は中共に比べたら問題にならぬ位高いが，祖国防衛のために戦意昂揚に努めた日本の戦時中の状況を思出させる。その為でもあろうが，治安は極めてよい。台湾旅行で夜の町を自由に散歩できるのは何といっても最大の魅力である。台中でも台北でも，盛り場の雑踏を探訪した。

蛇を店頭にすだれみたいにブラ下げて，その場で裂いて食べさせる店が何軒もあって，結構繁盛しているのには驚いた。もの珍らしさもあって店を覗いてまわったが，とある骨董屋の店先に日本の明治時代の１円銀貨を発見した。古色蒼然としてしかも鋳造年代の古いもの程高価，試みに手に取って爪ではじくと，何ともいわれぬ涼しい音がする。これは掘り出し物と「大日本　明治八年」と刻まれた銀貨を，日本円3000円に値切った末入手する。あとでその道の詳しい人に聞いたら贋金らしい。それでもその後日本で新しくできた500円銀貨と比べると，音色の妙なることは問題にならない。

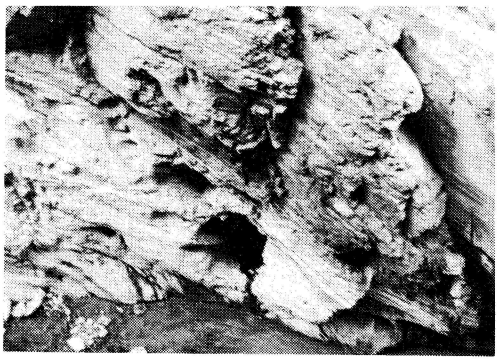


写真6　タロコ渓谷展望所より足下を俯瞰

台北の故宮博物館は花蓮のタロコ渓谷と共に今度の旅行の目をみはるようなハイライトであった。中国5000年の歴史の集大成。万里の長城を築いたような権力でもって，時の名工に作らせたり，四百四州から集めた歴代の秘蔵品であるから凄い。ヒスイの屏風など天下の逸品であろう。数年前ワシントンのスミソニアン博物館を訪れた時にも，ヒスイの彫刻技術の最頂期とされる清朝時代の中国のヒスイのコレクションにも驚いた。近くでは，佐賀県武雄の慧州園でもヒスイのコレクションを観光客に公開しているが，一見の価値は十分ある。ヒスイはやはり東洋の宝石である。鉱物資源は再生できないから，こんな豪華な文化遺産は，今後作ろうとしても原石の入手の点からも不可能ではなかろうか。

日本統治時代の台湾神社はいま中国軍人の英霊を祠る靖国神社となっている。門に立哨する衛兵は特別に脊が高くハンサムで，まるで人形のように微動だにしない。丁度ローマのバチカン法王庁のスイス人傭兵だという衛兵もそうであったが，ここでは物珍らしさから現地の観光客が衛兵のそばに一緒に立って次から次に記念撮影している。私も真似して友人にシャッターを切って貰う。な

およく注意してみていると，この衛兵は若い女性がそばに立った時だけ眼が一瞬かすかに動いている。

資料館の廊下を奥まで行くと，日中戦争時代の日本軍の捕虜が日本軍からの戦利品と共に写った写真が掲げられている。その前で現地の人が何か誇らしげに話している。台湾の小学校の教科書には「日本は東洋のチッポケな国。歴史的に文化の進んだ中国よりいろいろ学んできた国なのに，今度の戦争では今迄の恩を忘れて中国本土に進攻した」と書かれている由。言葉は分らないが，話の内容は想像がつく。こっそりその場を抜け出す。

む　す　び

かけ足で台湾を一周旅行しての感想。

天与の恵まれた自然条件と相俟って，台湾は政治的にも経済的にも東南アジア諸国の中では，最も安定しうまくいっている国の一つであろう。日本の神話にでてくる「豊葦原瑞穂(トヨアシハラミズホ)の国」とは日本の大八州(オオヤシマ)より，反ってこの米粒のような台湾こそその名にふさわしい，とさえ思われる。しかし，香港も中共に返還されるという揺れ動く世界情勢の中で，台湾の国際的な立場は嫌でも将来微妙なものとなるものであろう。

外に向かって身構え，神経のビリビリしたものが旅行者の膚にも伝わってくるようであった。あるいは，私達日本人が余りにも無防御で，戦争なんてよそごとみたいに呑気で無関心だから，特別にこんなに感じたのかも知れない。

次の日，美しの島の戦火に荒らされることなく，いつまでも平和であることを心の中で祈りつつ台湾を後にした。